

## 平成28年度第2回埼玉県総合教育会議議事録

### 1 開会、閉会の年月日及び時刻

平成28年11月2日(水) 午前9時開会  
午前10時閉会

### 2 会議開催の場所

知事公館 大会議室

### 3 出席した会議の構成員の氏名

○上田清司知事

○埼玉県教育委員会

藤崎育子委員長、志賀周子委員長職務代理者、門井由之委員長職務代理者、  
高木康夫委員、上條正仁委員、関根郁夫教育長

### 4 構成員以外の出席した者の氏名

○知事部局の出席者

小林一彦総合調整幹、関口圭市総合調整幹付主幹、  
草野敏行秘書課主幹

○教育局の出席者

櫻井郁夫副教育長、  
柚木博教育総務部長、古川治夫県立学校部長、安原輝彦市町村支援部長、  
小澤健史教育総務部副部長、渡邊亮県立学校部副部長、吉田正県立学校部副部長、  
松本浩市町村支援部副部長、藤田栄二市町村支援部副部長、佐藤裕之総務課長、  
岡部年男教育政策課長、□川達郎財務課長、加賀谷貴彦保健体育課長、  
大根田頼尚義務教育指導課長、栗原正則総務課報道幹、飯村光良教育政策課副課長、  
案浦久仁子教育政策課副課長、塩崎豊義務教育指導課副課長、  
我妻卓哉義務教育指導課主幹

5 会議に付議した事項

小・中学校における児童生徒の学力向上について

6 発言の趣旨及び発言者の氏名

開 会

○関根教育長 それでは、時間になりましたので、ただいまから平成28年度第2回埼玉県総合教育会議を開催いたします。

本日は傍聴の申し込みがありますので、傍聴人の方に入場していただきます。

(傍聴人入場)

○関根教育長 それでは、議事の進行につきまして、上田知事をお願いいたします。よろしくをお願いいたします。

議 事

小・中学校における児童生徒の学力向上について

○上田知事 傍聴者の皆様も含めまして、改めて、おはようございます。それでは開会をいたしますが、今日は「小・中学校における児童生徒の学力向上について」、意見交換を行いたいと思います。

まず、資料の説明を関根教育長からお願いいたします。

○関根教育長 それでは、こちらの資料ですが、まず1ページです。今年度の全国学力調査の都道府県別正答率一覧でございます。

既に報道されておりますとおり、小・中学校とも全ての教科区分で全国平均を下回っているという結果で、大変重く受け止めています。

次に2ページを御覧ください。こちらは各都道府県の成績を、高い方から順にグラフ化したものでございます。このうち白い棒グラフの部分は、全国平均からプラスマイナス5ポイントの中に入っている自治体でございまして、5から6割の都道府県が含まれ、埼玉県もこの中に入っております。

昨年度は、埼玉県はこの中に入っておりませんでしたので、若干改善はしたということ

になりますが、依然、低い状況に変わりはありません。

次に3ページ、4ページですが、これは今年度の県の学力調査の市町村別の結果を色分けしたものでございます。青は正答率が高い自治体、黄色は平均程度、赤は正答率の低い自治体を表しています。それぞれ、小学校、中学校のページになっております。

続いて、5ページを御覧ください。こちらは今年度の全国学力調査の結果から見えた主なポイントにつきまして、4点、御説明いたします。

まず、1点目ですが、計算や漢字の読み書きなど単純な問題よりも、文章題など複雑な問題に課題がございます。

次の6ページを御覧いただきたいと思っております。こちらに問題例を掲載しております。これは小学校算数Aで出題された問題で、全国の正答率との差が一番大きかったものです。1番の問題ですが、文章を読んで、小数の割り算の意味を理解しているかどうかを問う問題で、右上の記載にございますとおり、埼玉県は全国の正答率、また中位にある大分県の正答率より低い状況でございます。

次の7ページを御覧ください。中学校国語Aで出題された問題で、いわゆる読み書き的な問題です。こちらは、埼玉県の正答率は全国と比較して高い状況でございます。

このような問題の正答率が高いのは、これまで取り組んできました3つの達成目標の成果である一方、その前の6ページの問題が解けるようになること、まず、こちらが全国平均にたどり着くのに必要であると考えております。

恐縮ですが、5ページにお戻りください。2点目のポイントですが、質問紙による調査の結果によりますと、主体的に考え学ぶ授業を受けている子供の学力は高いということです。

表のとおり、「自分から課題に取り組んだか」という問いに対しまして「当てはまる」と回答した子供のほうが、「当てはまらない」と回答した子供より正答率が高い結果でありました。これは全国的にも同様な傾向でございます。

次に3点目ですが、家庭学習をしていない子供の割合が全国や学力上位県より高いということです。表のとおり、授業時間以外に平日全く勉強していない子供の割合が、埼玉県は、全国平均や学力上位県と比較して多い結果でした。学校教育の充実とともに、家庭での学習習慣も重要だと考えております。

次に、4点目ですが、規律などの面では全国と比べ引き続き高い傾向を示しているということです。こうした良いところは維持しつつ、学力を向上させていきたいと考えており

ます。

次に、今後の対応です。資料の下段です。各市町村では、昨年度の全国学力調査の結果を受けまして、学力向上のための重点的取組を実施してまいりました。県では、各市町村に対して、昨年度の重点取組の効果の検証を行った上で、今年度も改めて重点取組を設定、実施するよう要請しております。

また、学力が相対的に低い、あるいは学力が伸び悩んでいるなど、学力の向上に課題を抱える市町村に対しまして、重点的に支援を行っていきたいと考えております。

少し飛びまして、8ページを御覧いただきたいと思います。こちらは、今年度の県の学力調査における中学校3年生の過去1年間の「学力の伸び」と、今年度の全国学力調査における中学校3年生の合計正答率の相関を示したものでございます。一つ一つの点が市町村の結果を表しております。

こちらの結果から、県の学力調査における「学力の伸び」と、全国の学力調査の正答率には相関があることが分かります。県では、市町村や学校が県学力調査の結果を分析して、指導の改善を進め、学力向上に取り組むよう支援してまいります。

次に、1ページ飛びまして、10ページを御覧ください。これは今年度の県学力調査の結果から判明した「学力の伸び」の状況でございます。資料に記載のグラフは、国語、算数・数学、英語の、教科ごとの学力に伸びが見られた児童生徒数の割合を経年で示したものでございます。

小学校4年生から学年が上がるごとに、学力が伸びた児童生徒の割合が減少して、特に中学校1年生から2年生になる際に伸びた生徒が最も少なくなるという結果でした。これは一般的な感覚として言われている「中1ギャップ」というものが、データに基づき分かったということになります。

次に11ページを御覧ください。こうした結果を受け、(1)の【対応】にありますとおり、小学校と中学校の学習内容の変化を意識した指導を推進してまいります。

現在、県では、県内の小学校2校を指定して、児童の学習状況などをカルテのように記載していく取組の研究を行っております。この学校では、「学力の伸び」が他校と比較して大きい傾向にありますので、この成果を学校種間、小・中学校をつなぐ取組として、他の学校に普及していきたいと考えております。

また、(2)、(3)にありますとおり、専門的なデータ分析の実施や、各市町村教育委員会や学校による分析と指導改善への支援を行ってまいります。

最後に、12 ページには、県の学力調査の市町村別結果一覧を添付させていただきました。  
資料の説明は以上でございます。

○上田知事 ありがとうございます。

では、早速ですけれども、どのような御意見で話していくかということの特に決めているわけではありません。今の説明を踏まえて、課題とその解決方法についても、教育委員会の方で出しているところですが、基本的にはその課題についての認識を一致させるのか、必ずしも一致しないのかということ、それぞれ委員の皆様方からお話をお聞きしたいと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。

どうでしょう。高木委員。

○高木委員 今、教育長から御説明いただきましたが、我々も委員として、各小・中学校に視察などに行って感じる事なのですけれども、非常に先生の指導というのが一つは大きいと感じております。特に、学校によっては、小規模校であったり、大規模校であったりしますので、そういう学校間の差というのが教育現場でどう現れているのかなというのを強く感じております。

人口に応じて、子供たちの数に応じて学校の規模が決まってしまうので、何とも申し上げにくいところなのですけれども、各自治体の方で、その辺のところを、統廃合ということではないのですが、適正規模が本来どこなのだろうということを含めて、今後考えていく必要があるのかなということの一つ思っております。

それと3ページと4ページの色刷りした部分を見ておきますと、やはり中核市や大都市圏は、そういうところが手厚いのかなという印象を持っております。そうでないところは駄目だということではないのですが、中核市や大都市圏については、そういったものに対して、かなり充実したものが施されているのかなという気がしています。

過日、文科省の講習を受けてまいりました。学校の先生の勤務時間等について、いろいろ討論があったのですが、小・中学校において、私が問題提起させていただいた部分がありまして、それは在校時間です。先生の在校時間が非常に長いのですね。

我々、一般企業の考え方ですと、週40時間が適正だというふうに認識しているのですが、登校前に小・中学校の先生は学校に来られて、そして子供たちが下校した後も、残業というのでしょうか、そういった仕事をしていく。それを毎日繰り返していくと、やはり先生方の疲労とか、そういったものも何かの形で現れてくるケースもあるのかなという印象を持ちました。

全国から各教育委員の方が集まって、いろいろ分科会などで話をしたのですが、やはり各自治体でも、先生方の勤務時間についてはかなり危惧を持っておりまして、そういったものを何らかの形で改善しないと、きちんとした教育環境をつくるのに難しい部分があるのではないかという声もありました。

ですから、先生の部分はそういうことで私は感じているのですけれども、もう一つは、子供たちにおいては、先ほどの結果の中で1点ありました、文章を読むという部分ですね。読解力。例えば6ページの算数とか、7ページの国語についても、文章を読んで論点をしっかりと頭の中で整理して解答に結びつけるということが、ちょっと不慣れなのかなという印象は持っております。

その辺はどうしたらいいのかというと、やはり日頃から文章に接するといいますか、読書をするというのは、もちろん大事なことなのですけれども、埼玉県のある大きな市町村では、教育委員会を挙げて作文コンクールをやられたりしてしまっていて、そういった成果も上がっていることも聞いておりますので、そういうことも今後、全県通じてやっていく必要があるのではないかなという印象を、私は個人的に持っております。

○上田知事 ありがとうございます。

ほかに。どうぞ。

○上條委員 私はまだ、教育委員としての経験年数といいますか、日数といいますか、そういったものは短くて、大したことは言えないのですけれども、ただ今回、全国学力調査の結果を見ますと、より良くなったといっても、まだまだ残念な結果だなというふうに感じております。

一般の企業活動で何か課題が出た時に、短期的に対応するか、長期的に対応するかというのを対策として講じるわけですが、現在、埼玉県で取り組んでいる県の学力調査、これは中長期的に非常に地に足のついた、長いスパンで物事を見ながら、より良くしていくという意味では、大変いい取組ではないかなというふうに思っております。

結果的に、全国学力調査と県の学力調査の問題の中身だとか内容を精査することで、相关性だとか比較をすることで、今足りないものが何なのかというものも出てきますし、また地域的にどういう課題があるのかというようなことも出てくる。授業のやり方とか、あり方というものも、より一層、具体的な形で見えてくるのではないかなと、そんなふうに思います。

今度は短期的に、それをいかにスピーディーに、先生方の研修だとか、授業のツールだ

とか、そういったものにうまく生かして、短期的な成果を結びつけながら、中長期的なスパンで地に足のついた政策に生かしていくということが非常に大切なのではないかなというふうに感じました。

一般に、企業人として見ていますと、ここまで細かく数字を見る機会がなかったのですけれども、大変いい機会をいただいて、かなり中身が見えてきているなというのは感じております。

○上田知事 ありがとうございます。

実は私は知事という立場で、市町村の財政力指数なども、ほとんど頭に入っております。それから各市町村の納税率も、大体、頭に入っております。それから、市町村の犯罪の件数などについても頭に入っております。そういうものとかこういうものは、若干、相関関係があるような気がします。もちろん例外はあるのですが。

例えば、財政力指数の高い地区は、青が多い。つまり正答率が県平均よりも高い。実は税収も多い。したがって、学習塾、もしくはそれに類する家庭的なサポートなどが、経済的にしやすい環境にある。この点もあります。

もちろん、財政力指数が高いということは、住んでいる方々の住民税の割合が埼玉県は特に高いですから、消費税などは東京の方に払っていたりして損しておりまして、どちらかという、千葉県などは成田で儲かって、自分たちが消費する以上に消費税が入るとか、東京都もそうですけれども、そういうことを考えると、埼玉県は実は住民税の割合が多いところでありまして。つまり住民の所得が高いところほど納税率も結果的には上がってきている。財政力指数も高い。

したがって、お金に余裕がある市町村ほど、細かい教育についても手配がしやすい。例えば教師の加配であるとか、施設面でのカバーとか、そういうものもあるというふうに思っております。そういう部分で、高木委員の言うところの地域間の格差みたいな問題が出てくる。

適正規模の話になってくると、実は赤のエリアほど対人口比で教師の割合が多いわけですね。考えによっては、より少人数学級が実現しているのです。一般的に、少人数学級であれば、より面倒見がいいから、成績も上がるのではないかと、こういうふうなイメージでとらえているのですが、日本一、対人口比で教師の多い高知県が、一番不登校が多い。それも、かなり長い年月にわたって不登校の数が多い。しかも対人口比率では教師の数が多い。面倒見がいいはずなのに、なぜ不登校がたくさん出るんだと。

一般に、ローカルで穏やかな地域であれば、地域コミュニティもしっかりしているので不登校なんか出るわけがないと。実際、埼玉県の東秩父村、人口約三千人の村は不登校ゼロ、一方、実は八潮とか三郷とか、このあたりは不登校が多かったところなのですが、三郷では、近年、市を挙げて読書の取組をやっている。したがって、読解力が上がっている可能性が高いというふうに思っています。

そういうことも考えると、読解力が上がっている三郷市が、高いレベルでのポイントを取るような形になってくる。納税、財政力指数からすると、三郷は黄色もしくは赤かもしれないところであるのですが、そうではない。やはり取組によって、形が見えてくるというのがあるのではないかと思いますので、そうした分析なども加えていただければありがたいと思っております。

座長的な立場では早目に喋ってはいけないのですが、たまたま高木教育委員が総括的に言われて、先生の疲労の話もありますが、よりローカルの方が、自宅との関係では近い。通勤だとか、そういうことで時間が取られていないということである、疲労があるから赤かという話ではなさそうな感じも、私はしております。

むしろ、川口とかさいたま市で住居を持つというのはなかなか困難ですから、通っておられる方々も結構いるのではないかと思います。県庁でも、職員の雰囲気を見ると、圏央道沿いの周辺に住居が実際に多くて、浦和周辺には皆あまりいない。浦和周辺で自宅を買うほどの給料は貰っていないと、こういうことになって、皆、久喜の方に行くとか、鴻巣に行くとか、坂戸に行くとか。周りでもうなずく方々が多いので、多分その辺も当たっているのではないかなと思っておりますが、そういったことも含めて、教員の疲労度というのは、また成績とは関係ない形で出てきているのかなというふうに私は思ったりしております。

少し喋り過ぎて申しわけありません。どうぞ。

○藤崎委員長 先ほど高木委員が、先生が大事だとおっしゃったことは、本当に私もそのとおりだと思っております。実は先日、少人数学級の小学校を教育委員で視察をさせていただきましたところ、給食でサンマの骨の取り方をきちんと教えて、皆で食べるという給食の時間を見せていただきました。

子供たちは一斉に骨を取って、「これ持って帰っていい？」と。お父さん、お母さんに見せたいのですね。きれいに取れたから。そうしたら、先生は「それはちょっと大変だから」とおっしゃっていましたが、もし学校で、その機会がなければ、これから先もサン

マを食べるのが、こんなに楽しいことだとか、おいしいものだと知らずに終わってしまったかもしれません。もちろん他方で見れば、それは家庭でやることでしょうかという意見もあるかもしれませんが、共働きなど、いろいろなこともありますし、学校で教える、体験する時代になったのだなと感じました。それを見ていました時に、低学年でそうやって少人数学級で、先生たちの目が行き届く状態はとてもいいなと思いました。ところが、やはり高学年になってきますと、先生方の悩みは人数が少ないということです。一人一人意見を言っても、あっという間に終わってしまい、多様な意見が出る学級経営という面においては、子供たちが集団の中で刺激を受け合うという面において、やはりどうしても不足してくるという悩みを話されていたのですね。

少人数学級は、先生たちの目が行き届くかもしれませんが、実は私、学校の先生のすばらしいなと思う点として二つあると思っておりまして、一つは分かるように教えるという授業を展開されている先生、それからもう一つは、やはり学級経営だと思うんですね。そのクラスの中でいじめがないとか、何か困っている子を助けるとか、そういった学級経営に関しては、やはり少人数というより、ある程度の適正規模があるのかなというふうに感じました。

どうしても、この点数を見ていますと、自治体ですとか、都道府県とか、比較の対象になってしまうのですが、実際に学校に行きますと、子供たちがどうやって生きていけるか、先ほどのサンマの骨もありますけれども、そういう授業が学校で行われていることは、やはり学校文化というのはすごいなと思うわけです。

問題などを見ていまして、確かに文章力が付いたらいいのですが、例えばすごく数学ができる子でも、ハウレンソウを湯がく時に、「茎から入れる？ 葉から入れる？」といった時に分からない。数学ができてでも答えられない。ところがお家で手伝いをしている子は、パッと「茎から。時間かかるもん。」というふうに答えるわけです。

ですので、学力のその先のもの、実体験に結び付くような、そういう学校教育というのを目指してほしいということも思っております。家庭学習をしていないから駄目かというのと、そうやって家の中で生活の知恵から、いろんな学習力、学力が伸びている子もたくさんいるのではないかと感じています。

○上田知事 門井委員、どうぞ。

○門井委員 今、委員長が家庭学習のお話をされました。前回の全国学力調査の関係でも、やはり家庭学習が埼玉は非常に低い、家庭で勉強していない子供が非常に多いという結果

で、今回もそういう結果が出ています。

確かに家庭で、いわゆる生きていくためにいろんな実体験も含めて教育をするというのは非常に大事なわけけれども、なかなかそれができないので学校でというお話もあるのですが、私の考えとしては、学校、特に小学校、中学校の義務教育は、やはり基本的な勉強を教えるところだというように思います。それは皆さんもそうだと思うのですが、子供たちに自主的に勉強しろといってもなかなか難しいので、ある程度、強制力をもって勉強させるというのは非常に大事なことなのではないかなと。

ですから、その点、先生が自信をもって、子供たちに生きていくための知恵を教えることもさることながら、やはり第一義的には勉強を教えるのだというのを、もう少し徹底してやっていただくような方向性にもっていかないと、なかなか伸びていかないのかなという感じをもっております。非常に悩ましいのですけれども。

○上田知事 では志賀委員。

○志賀委員 私、自分が子育てしている観点からしまして、5ページの2番に「主体的に考え学ぶ授業」というふうにあるのですが、この主体的にというところがやはりポイントだと思っています。子供たちの自主性といいますか、自分から学ぶ姿勢の子と、やらされている子、やらなければ仕方がないと思ってやっている子と、取組の内容というのは随分変わってくるのではないかと考えています。

私もいろいろな学校へ就学時健診などの際に行って、その時の講演とかをやらせていただいているのですが、その中で感じるのが、お母さんや学校の先生も、主体的というと、イコールいい子だと思っていらっしゃる方が多い。実は主体的というのは、自主性がある子なので好奇心旺盛な子が多いのです。ですので、好奇心が旺盛ということは、いろんなところに目がいく子、自主的に何かを取り組もうとする子が多くて、実は親の言うとおりにならないといいますか、親にとってはやりにくい子なのです。

皆さん、先生や親にとって、やりやすい子が主体的な子というふうに思っていらっしゃる方が多いのですが、実は主体的に取り組める子というのは、自己実現力というか、自分で何かを見つけてやろうとする。だから、その力を伸ばすのは、私は遊びというものが大事だと思っているのです。

これは科学的にどうというのは分からないのですが、遊びも一生懸命やっている子は勉強も一生懸命やる。塾に行っている子もいっぱいいるのですが、うまく時間を使って、ふんだんに遊んで、時間になれば塾にスパッと行くとか、親が何も言わなくても、小学校の

頃から、時間になれば遊びをピタッとやめて塾に行っているのですね。そういう子たちは今も、中学、高校になっても、すごくレベルが高い子が多いような気がしています。

やはり小学校の頃は遊びも仕事で、遊びも勉強も学びのうちだと思っています。もちろん小学校の頃にしっかり学力を付けて、とにかく学ぶことの楽しさが小学校でいかに理解できるか。小学校の時の勉強が嫌だと思いながら、嫌々やってきた子というのは、中学、高校になっても、どこかでつまづくといいますか、特に中学校でガクンと授業の内容が難しくなるんですが、そこでやはり中1ギャップというのがあるのかなと思います。

今までできていた子が、ちょっと分からなくなると、そこで学校へ行けなくなっているという子も、私の知っている中ではいらっしゃるんで、自分から、自らやりたいと思って自主的に取り組める子の育成というのがポイントなのかなと。難しいところではあるのですが、そのように感じています。

○上田知事 エジソンみたいな人とかが生徒だったら、先生はやりにくいでしょうね。好奇心旺盛で、多分、試験は悪いでしょうね。ただし時々、光るものを見せるので、この子はひょっとしたらということで見守っていただければいいのですけれども、しょうがない子だなということで見捨てられてしまったら、なかなか難しいところですね。

この辺が難しいのですが、限られた時間ですので、少し絞らせていただいてもいいでしょうか。問題提起のあった適正規模、学級経営、または教師が、ある意味ではまとめやすい規模、なおかつ子供たちにとっても、例えばあまり少ないがゆえに、本当にいいコミュニケーションが取れるような状況の時にはいいのですが、たまたま波長の合わない人が一緒にいたりすると、壁がないもので露骨に当たってしまう。我々なんかは55人ぐらいいましたので、うんと離れていましたので、気に食わない人とは、その日、口も利かなくても済んでしまったので、遠く離れていれば何となく別にそれでよかったというのがあるのですが、あまり規模が小さいと、皆、接することができる。

それから、いろんな個性を学ぶという意味でも、こういう適正規模がどうなのかということ、この点については、教育長、どうでしょうか。例えば小・中学校で、この学力調査と絡んだ形の中での適正規模というのは、少し交通整理ができるものなのではないでしょうか。それとも実現不可能なものではないでしょうか。

○関根教育長 適正規模という場合に難しいのは、現実的に、子供たちの人数に地域性があることです。この程度が適正規模ですよと言った時に、例えば北部の方では人口が減ってきて、学校の適正規模ということで統廃合すると、通うのが非常に大変になるという別

の問題が出てくるわけです。

ですから、学力について何が一番適正規模かと考えても、現実論としては対応できない可能性が高いです。では、都会の方で人数の多いところが成績が必ずいいかということ、そうでもないということもありますので、適正規模というよりも、その規模に応じた指導法というものが大切だと思います。よく少人数学級と言われますが、私の実感的には、少人数学級がいいかどうかというのは、それに適応した指導法をやっているかどうか。つまり大人数と同じ指導法を少人数でやっても、それほど大きな効果は出ないので、少人数に適した指導法を開発していくべきだし、やっていくべきだと思います。置かれている現狀的にも、都会では少人数に絞っていくのは厳しいですし、人口の少ない所では大人数にしろといっても厳しいので、やはりそれに適した指導法を開発していくことが現実的かと思えます。

○上田知事 教師の指導力というのも、資質や、経験とか、そういうもので徐々に鍛えられていくものだというふうに私は思っています。若い時は若い時で、歳が近い分だけ、子供たちが懐きやすい。それはそれで親しみやすいというメリットがありますし、その反面、経験不足で的確な判断に欠けたりする部分があったりするのですが、よしあしもあるので、総合的には私はあまり関係ないというふうに思っているのです。

何でも物事を学ぶ時に、基本形というのがあるではないですか。その中でも、今、教育長がおっしゃったような形で、規模に応じた適切な指導法があるのではないかと。そういうのをAパターン、Bパターン、Cパターン、Dパターンとかいって、一定の類型で最小限度の、あまりマニュアル化するとおかしくなってしまうのですが、こういう指導法があるのだねという学び方というのは教師ができるのでしょうか。

○関根教育長 実はそれを県学力調査では目指しています。今までもいろいろな指導法のいいものはあったのですが、結構、流通していないですね。ですから、もう少しお互い教員同士が学び合いをしていったり、同じ学校の中でも、いい教材をお互いに使ったりすること。例えば新人の頃であれば、いい指導法、いい教材を、まず真似て使えるようになるということが大事で、技術もそうですけれども、一番いい指導法を見てできるようになると、そういう文化を作っていかなければならないと思います。例えば埼玉県の中でも、本当によくやっている先生がいて、その指導法が隣の学校、また、同じ学校の中でも本当に使えているかということ、そうでもないということがありますので、ここをきちんとしたい。

ただし、今の時代、ただ「いいですよ」だけではなかなか広まらないので、科学的に、

これは効果があるということを検証して示す必要があります。そういう意味で、県学力調査ではデータを基にして、こういうことをやったら成果が出ると示すことができます。つまり学校の中で成果が出たものは、あくまでそのやり方がいいのではないかという仮説だと思っています。それをまた繰り返してみる、他の学校でやってみる、その中で成果が出れば、これはその仮説が正しかったこととなりますので、そういうものを積み上げていくことを県学力調査ではやっていきたいと考えています。

これは上條委員が言われるように、中長期的な対応となりますので、短期的な対応について言うと、やっていってほしいのは、できる授業をしていくということです。藤崎委員が言われたのですが、先生方は分かる授業をよくされるのです。私もこの間、授業を見に行き、先生方は非常に分かる授業をしているのですが、残念なのは、できる授業にしていけないのです。分かることと、できることは違いますので、やはりできるようにするための授業の工夫が、もう少し必要かと思っています。

そういう意味で、昨年度、県としては学習の定着を図ることを頑張ってくださいということを各市町村に言ったのですが、まだまだ、この意味とか具体的なものが、現場に分かっていたいていないということがあります。分かる授業をしているのですが、それが定着するようにどうしたらいいかという工夫が短期的には必要で、これを広げていきたい。短期的には分かる授業からできる授業へ、中長期的には今言ったいいものを共有していくという文化を県全体に作って行って、全体の質を上げていきたいと思います。

特に、今、年配の経験者がどんどん退職されていきます。また、中堅層が採用できなかったのが少ないです。そうすると、真ん中の中堅層がいないので、若い人は年の近い先輩が少ないですね。ですから、そういう面で、いいものの継承が非常に厳しくなる傾向がありますから、ここは意図的にやって、県全体の指導力を上げていくことにつなげていこうというのが、県の学力調査の一番の目的だと考えております。

○上田知事 時間に限りがありますので、勝手ですが、座長の立場で、家庭学習の部分と、私は少し困難地域だと見ている三郷の成功事例、この二つに絞って、意見の交換ができればと思っています。

まず、家庭学習をどのような形で、何らかの形で教育委員会、しかも小・中学校ということに関して言えば、我々の権限外の話にもなっておりますので、市町村教育委員会と協力しなければいけないのですが、県側として、どんなアプローチが可能なのかどうか。これについても皆さんから意見の開陳をお願いしたいなと思っておりますけれども、いかが

でしょうか。

どうぞ。

○高木委員 家庭学習について、保護者の方と意見を交わすことがあるのですが、「昔から比べると」という言葉が出てしまうのですが、「最近、宿題が少ないよね」と。宿題が多いか少ないか、ということではなくて、「宿題が少ないよね」という声が多いんですね。

そうすると、子供が自宅に帰って、何もやらない。では、親はどうするのだろうかということなのですが、宿題を持ち帰らせると、逆に、こういった課題を与えてほしいという家庭からの声もあったりして、宿題とか課題を自主的にやるようなきっかけをつくる材料を持ち帰る機会が少なくなっているのではないかなという印象を受けたのです。

それがあれば家庭学習が増えるとは限らないのですけれども、何か違った雰囲気といいですか、そういうものを払拭していかないと、家庭学習をやらない子はほとんどやらない、だけでも自分なりに予習していく子は予習したり、また復習をしたりする、こういう差がどんどん出てきてしまう気がするので、先ほど志賀委員が言われたような、好奇心を持つような課題の与え方というのですか、何かそういうものを提供できるような環境づくりが必要ではないかなというふうに感じています。

○上田知事 これは教育長というよりも、市町村教育委員会とよく連携をされている担当の皆さんで、今日的に、宿題とか課題とかということ、市町村の教育委員会がどのようにして受け止めているか、あるいはまた最近の実状がどうなっているか、開陳できますか。

○安原市町村支援部長 いくつかの例になりますけれども、例えば坂戸市だとか川島町、吉見町などでは、教育委員会と学校と家庭で共有した思いで子供たちに学習に取り組ませようということで、家庭学習ノートのようなものを自治体独自で作っています。そして、子供たちもそれを共通に持って、学校と家庭とで、進度だとか内容だとか、あるいは意欲に関わって、どれぐらいやる気があるのか、ないのかということを学校でもチェックしながら、家庭学習に踏み込んでやっているところがあります。

もう一つ、県の学力調査もそうなのですが、全国学力調査も問題そのものを学校と家庭で共有しようと、親も解いてみましようというような形で、意識的な啓発をしている。そういう学校ですと、親も、こういうテストを受けているのか、うちの学校はここが課題なのかとか、ここはいいのだなというものを学校と家庭で共有すると、家庭学習を見る家庭の目も変わってくるというような例はございます。

○上田知事 坂戸、川島、吉見、比較的、近隣ですね。相互に啓発を受けてやっているの

でしょうか。

○安原市町村支援部長　そういう面もあると思います。それぞれ立ち位置は分かっていますから。

○上田知事　それで何か著しい成果というようなことが、確認が取れているようなデータというのはあるのですか。

○安原市町村支援部長　いえ、まだ県学力調査を初めて2年目ですので。

○上田知事　そうですか。どこかで、実験的にやって、実証結果が出ているような事例というのはないのでしょうか。この場が出なかったら、次回、発表したり、少なくともデータだけでも後で配ったりしていただければ。ありますか。

○安原市町村支援部長　先ほど知事からもありました三郷市などでは、読書活動を学校と家庭で、市全体でやっています。

これは平成19年度と平成28年度のデータで、全く同じ問題ではないので何とも言えないのですが、平成19年度当時やっていた全国学力調査ですと、三郷市は県平均よりもマイナス8ポイントぐらい悪かったのですが、28年度の学力調査ではプラス6。つまり14ポイントほど上がっているというデータはございます。

○上田知事　どうぞ。

○藤崎委員長　家庭学習については、本当に格差がありまして、例えば親が「宿題を出してほしい」と頼んで、先生が何とか、「1日2ページ、好きなことを勉強しなさい」という宿題を出す先生もいらっしゃるほど、先生それぞれの考え方ややり方で、大分差が出ると思うのですね。結果として、提出されたノートを見ているがために、休み時間に子供たちの様子を見るができないと悩まれる先生もいらっしゃいます。

一つ、私自身が地方に行くと感心することは、家庭学習とゲームやネットとか、そういった時間を、約束を守ってきちんとやって、ゲームなどの時間を減らしましょうということです。家庭学習とお手伝いと、家庭学習の中には読書や、親に読んで聞かせるという部分も含まれておりますが、今、子供たちに、かなりネットというものの影響があります。

ゲームをやったら止まらない。また、夜遅くまで学習塾に行ってきた子供たちが、帰ってから12時ぐらいにネットで集合して、携帯でコミュニケーションを取ったりして、そして朝、寝不足の状態ですと学校へ行くというような様々な例を見ていると、やはり家庭学習だけではなく、子供たちのネット依存とかゲーム、大事な脳の成長期に、そこまでバーチャルなものばかりに浸ってしまった影響ですとか、そういったことですね。

それから先ほど門井委員がおっしゃった習慣というのは、習慣7割、意思3割とも言われており、習慣が大事ですから、こういったことを先生と保護者で、もっともっと話し合っていて考えていけるような土壌が必要なのではないかなというふうに思っています。

○上田知事 どうぞ。

○志賀委員 関連してなのですが、私、読み聞かせもやっているのですけれども、先ほどの三郷市の読書の取組は、今のインターネットのお話もあったのですが、ネット依存も、読書をすることで精神状態も変わってくるというようなデータが一部あるというように伺っているぐらい、読書は非常にいいと思います。

小さい頃からの読み聞かせボランティアとして、ずっと子供たちの現場に入ってきた者として思うのは、普段、落ち着きのない子でも、絵本を読んでもらう時というのは、皆、集中して聞いているのですね。そういう時の集中力というのは、私たちに突き刺さるような目といますか、すごく真剣に聞いてくれているのがよく分かるのです。

先ほど言ったように、子供は好奇心があるものとか、面白いとか、中に入り込んでいくと、普段、落ち着きがなくて大変な子であっても、そういうことに関してはすごく集中して聞いてくれるのですね。

小学校1年生から6年生まで、皆そうなのです。6年生でも、こんな本と思っても、保護者が読むお話とか、ボランティアの方が読んでくださると、集中的に聞いているのですね。

ですので、勉強というか、学びはすべて読解力といますか、気持ち、感情の伝わってくるものとか、そういったことは実はすべての教科に共通するものであって、読書というのは、実は今、子供たちもネットを使うようになってから、読書する機会が非常に減っているのですけれども、そういった時間をあえて作ることによって、そして親もそれを共感しながら、一緒に話し合えるようなことが大切だと思います。

子供は親に共感してもらったり、共感して聞いたりしてくれる相手がいなくてお話ししないものだと思うのですね。そういう親子関係、また先生と生徒のコミュニケーションといったことも、読書からどんどん広げていくこともできると思うのです。読書は、私はこれから、あえて時間に入れていく必要があるのではないかと感じています。

○上田知事 たまたま家庭学習から読書になっているのですが、どうぞ。

○上條委員 私、何十年ぶりかで学校に足を踏み入れて、いろいろな授業を見させていただいて、昔の授業と今の授業のやり方というのは、随分変わって、進化してきているなど

という感じを受けたのです。

中でも最近、アクティブラーニングというようなことが言われていて、グループワークだとか、テーマを与えられて、物事を調べて、考えて、それを発表する。それをグループで行っていったり、人を替えたりしながらやっているわけですね。

あんな授業は昔なかったなど、どちらかというに一斉授業で、座学的な授業が多かったなど思っています。これはもしかすると、保護者の方々も、現在の授業がどこまで進歩しているかというのを、まあ薄々分かっているながらも、なかなか共有できていない部分もあるのかなと。

したがって、考える習慣をつけるというアクティブラーニングと家庭教育、家庭での宿題のあり方、先ほどどういいう宿題を出したらいいかという話がありましたが、そういうものをうまく融合させていくことによって、それが読書につながったり、あるいは考える習慣につながったり、ゲームをやらない、時間を取られないというようなことにつながったりしていくのかなと思います。

授業と家庭教育をうまく結びつけていくことができるとよいと思います。アクティブラーニングは1時間、45分なりの1校時でやるのはなかなか大変だと思うのですね。中途半端なところで終わってしまいそうです。したがって、そういったものと家庭教育と、翌日の授業とがつながっていくようなやり方も必要かというように感じました。工夫が必要なのではないかなと思います。授業によって、よい刺激を子供たちにも与えられるのではないかな、そんなふうに思います。

○上田知事 ありがとうございます。

どうぞ。

○藤崎委員長 読書だけでなく、新聞とかテレビのニュースとか、家庭で話したりすることというので、それは高木委員が大変力を注いでおられると思うのですけれどもいかがでしょうか。

○高木委員 それでは1点だけ。実は熊谷市の教育委員会が一緒になって、もう7年ぐらい続けていると思いますが、小・中学生が新聞の記事を読んで作文を書くということをされているのですね。

非常にその作文の内容、質が高くなってきたという評価を今、得ていまして、子供たちが成長とともに作文をしっかり書く、つまり社会的な事象や事件などを見ながら作文を書くわけですから、読書感想文とはまた違うわけですね。社会とのつながりもありますので、

子供たちも社会に関心を持つ、そういうことも必要なのかなと、この間、そういう表彰式があったものですから、感じたところです。

子供たちが地域につながっていないというのも、最近多く感じていますので、やはり地域とつながるヒントも何かないといけないかなという気がしています。

○上田知事 家庭学習の課題、それから読書の話にまで展開しましたので、読解力の課題について重要性が高いということだけは、いろんな意味で、データの的にもある程度は出てきているものがあるかというふうには私は思っております。

そもそも読み聞かせというのですが、小さい子供が、いくつか好きなパターンがあると思うのですが、お父さんやお母さんの膝の上で絵本を読んでもらうというのは、とても好きなのですね。間違いなく好きなのですね。特に就学時前までぐらいの時はですね。多分、肌が触れている安定感とか安心感と、好奇心を満たす絵本、あるいは何回読んでも好きな物語とか、そういうものを感じることで精神も安定するというのでしょうか、二つの面で安心しているのではないかなというふうに思います。

親と肌でも接しているということ、それが結構、情操教育に役に立っているし、そこから次の読書だとか、あるいはもっと高いレベルになってくると新聞の読みとか、そういう形になっていくと思いますので、またそこに幼児教育まで戻らなくてはいけない部分がありますが、我々の守備範囲は、実は高校のところですが、小・中学校の部分がしっかりしないことには高校もしっかりしないわけですから、こうした踏み込んだところの議論させていただいているところです。

今日は適正規模に関しての議論がありましたが、基本的には、なかなか地域間での規模感を一定に統合することは極めて困難だということだけははっきりしており、まさに教え方のありようが問われているということですので、そうしたことについても、いくらかパターン化されたものを学ぶことも、それからまたプラスアルファを自分で作っていくというのは、物事の始まりのところであると思いますので、そういったものも、もし開発されていたり、あるいはまた既に何かあったりすれば、そういうものを提案していくようなことも必要ではないかと思います。

さらに、家庭学習の論点の中で、残念ながら埼玉県が低いと。この部分に関して言えば、通勤時間が47都道府県の中では、一番手、二番手ぐらいに、奈良県と並んで長いことなども影響があるかもしれません。家庭を顧みる時間が少なくなっている可能性が高い。そうした課題もありますし、ここ20年ほど、あまり所得が上がらないという形の中で、家庭的

にも余裕がなくなっているのかもしれませんが、いろいろ課題があるのですが、それでも取組次第によっては、課題の解決に成功している市町村などもあるということです。こういう成功事例を提案して行って、市町村間でよりいいものを作っていただいて、それを埼玉県の平均的なスタンダードにしていくような形をとっていけば、より高いレベルになるのではないかと。

北陸三県が、非常に安定的な学力が高いというのは、もう大体分かっていることであります。例えば福井県は、世帯所得で日本一。一人一人の所得は低いのですが、世帯平均で、一家で稼いでいる金額は日本一。つまりお父さんもお母さんも、おじいちゃんもおばあちゃんも働いておられる。したがって、総合計すると一番お金持ちだと。それゆえに子供たちに教育の費用をかけられるという部分もあります。家族構成などが比較的多いもので、面倒見がいいというものがあると思います。これは押並べて、石川、富山も同じような話だと思っております。

そういう意味で、埼玉県的には、ちょっとつらいところですけども、もっとも私は八潮だとか三郷あたりが困難地域だと思っているのですけども、その三郷が成功事例を出しているということ、あるいはまた八潮は不登校が多かったわけですが、急激に減らしたという成功事例もあるわけですから、可能性がないわけではないというふうに思っております。

こうした先行して、いい事例を出したところをどんどん紹介しながら、残念ながらそれぞれの市町村が比較対象する癖がないもので、比較対象する癖があれば、おのずから自分たちのことをしっかり認識して、どうすれば向上するかということについても熱心なのですが、全国学力調査を発表して、秋田県が1番だとか、沖縄県が最下位だとか、大阪が下から2番目だということで、研修に行ったり、視察に行ったりして改善されている部分もありますので、同じように全国版としての埼玉県版を、市町村によく知っていただいて、改善の努力をお願いするという形になるのではないかと思っております。

時間になりました。あと2分ぐらいありますが、どうしてもということがありましたら、どうぞ。

○門井委員 前にこの議論をした時に、県学力調査をしっかりと分析をして見ていけば、全国学力調査も伸びるのではないかというお話があったのですが、今日の資料は、まさにそういう形が出てきていると思います。ですから、教育長が言われたように、しっかりと分析をして、県学力調査の取組をしっかりとすることがいいのかなと思っております。

それともう1点、やはり県として、小・中学校の教師の人事配置は県でやるわけですので、しっかりと一人一人の教師に着目し、また地域差も含めて、少し学力的に落ちているところには、そういう先生を配置するとか、そういった取組を行うことが、ある面では即効性があるのかなという感じがしております。

○上田知事 ありがとうございます。

それでは時間になりましたので、議論は終了させていただきます。意見交換に出た様々な議論については、事務方におきましても、しっかり受けとめて、速やかに関係の機関と連絡を取っていただき、よりレベルがアップしていくように、改善の方向性について、なかなかお願いするのは難しいのですが、命令してもいけないし、あまり単純にお願いしていても先に進まないし、その微妙な兼ね合いをうまくとっていただいて、市町村に御協力をお願いしていただきたいと思っています。

それでは、今日は御苦勞様でございました。一旦、教育長にお返しします。

○関根教育長 今、知事から言われたとおり、県学力調査のいろいろな取組で、各市町村もやっていただいておりますので、この点もまた整理した上で御報告させていただきたいと思います。

それでは、以上をもちまして、平成28年度第2回埼玉県総合教育会議を閉会いたします。どうもありがとうございました。

閉 会